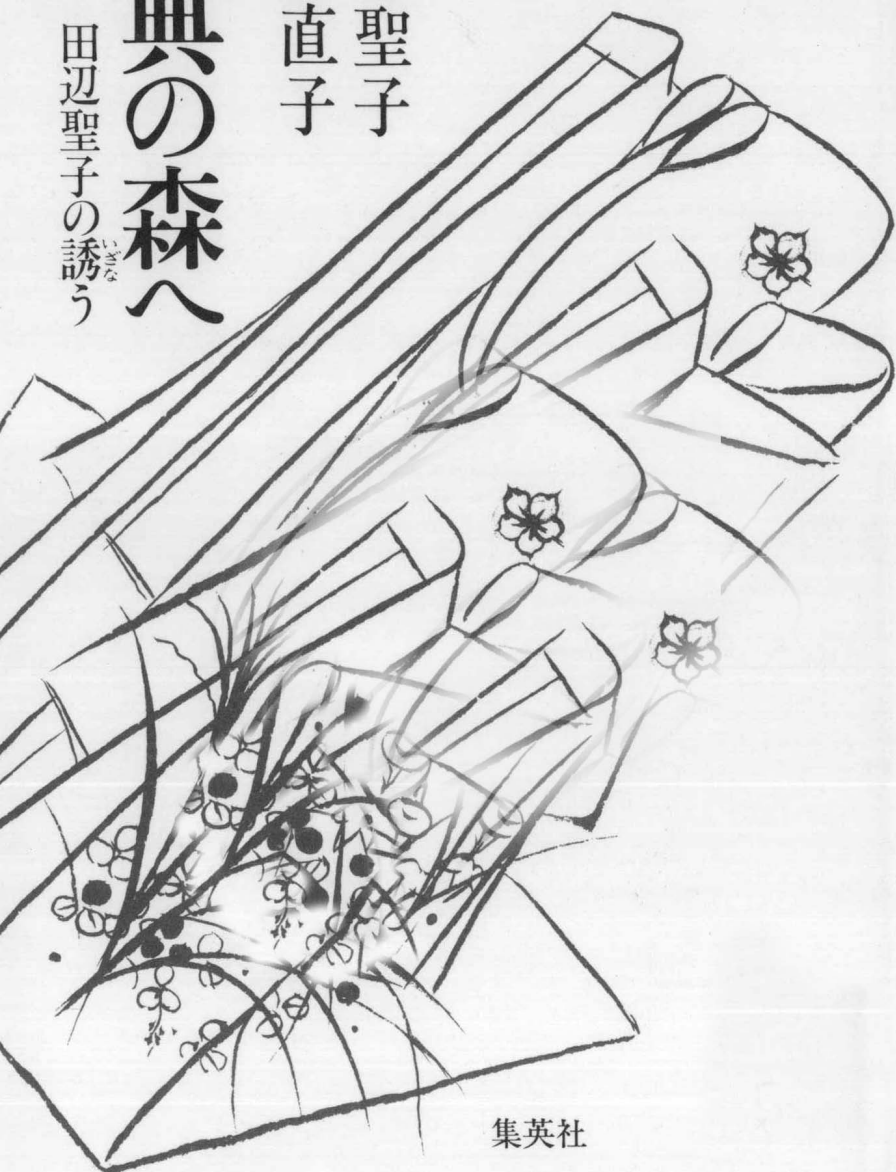


田辺聖子
藤直子

典の森へ

田辺聖子の誘う
いざな



集英社

古典の森へ 田辺聖子の誘う

一九八八年八月二十五日 第一刷発行

1,000円(本体九七1円)

著者 田辺聖子

工藤直子

装画 長谷川青澄

装丁 後藤市三

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

〒100 東京都千代田区一ツ橋二一五〇

出版部(03)二三〇一六〇〇
販売部(03)二三〇一六三三
製作課(03)二三〇一六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

古典の森へ
目次

はじめに 7

古典の森は花ざかり 11

『古事記』とわたし 19

女ごころのかぐや姫 33

『堤中納言物語』の姫君 41

『伊勢物語』の男のやさしさ 55

へ女なればこそ『枕草子』 67

「つれづれ」の世界を味わう 81

『蜻蛉日記』に見る男女の波長

97

和泉式部の恋華やかに

113

うたごころ 旅ごころ

129

歴史の人が生き生き動く『大鏡』

157

『平家物語』の人模様

171

日本のシンデレラ 落窪の姫

193

五人女の恋姿

207

源氏の君は理想の男

225

古典の森へ——田辺聖子の誘う

は
じ
め
に

これは毎日新聞から月一回発行される家庭版「はないちもんめ」に連載したものです。(88・8
187・3)「ミセスのティータイム」という欄に「おせいさんお茶がはいりました」というタイ
トルで、「はないちもんめ」編集長の山崎れいみさん、書きとめ役の工藤直子さんを相手に、私が
古典の周辺をとりとめもなくおしゃべりする、というものでした。

山崎れいみさんはベテランの女性記者としてかねて聞こえたかたですし、工藤直子さんはすぐ
れた児童文学者でいられ、お二人を聴き手に古典を説く、というのは、おこがましいことな
のですが、まあ、肩肘張らずにお茶を飲みながらのおしゃべり、ということ、つとめさせていた
きました。よき場、よき聴き手を得て、私のほうこそ、楽しみ弾んでおしゃべりができたこと
をお二方にお礼申しあげたいと思います。

古典案内としては、私は一九七四年に、『ふろま文車日記』を書いていますが、当時は今ほど古典ブ
ームは起きていず、私なりに気負いもあって、ずいぶん多岐にわたって、古典を紹介しました。
今度の本は、それより対象を絞って、もっとじっくりと、そして日常次元の中へ古典をとりこ
んで、おしゃべりしてみました。古典が受験科目や教科書にのみまつりあげられて私たちの日々
の暮しの中から弾き出されるのは、残念なことですから。

もっとも、日常次元で古典を使いこなしていけば楽しいと思うものです。

古典もマンガ化される時代ですが、古典のいのちは言葉にあります。文章の流れ、息のつぎか

た、言葉の使いかたにあります。原典の面白さ、その魅力は、いちど知るとこたえられぬ刺激です。それゆえ、この本では折々、原典の文章を紹介して、読者の方に、その香気を楽しんで頂けるよう、心くばりしました。

この本が手引となつて、原典をのぞいて下さることもあれば……と願っています。

「はないちもんめ」の紙面は毎回違うテーマにより編集されていますので、古典の手引のあとの話題もそれに拠っています。おしゃれについて、とか、お料理について、です。古典からはなれますが、そういうおしゃべりと同次元で、われわれの民族遺産をいとしみたいと思ひ、そのまま載せることにしました。そのほうが、きつと読者の皆さまの興を増すことにもなるでしょうし、また、はるかな遠い昔のわれらの祖^{おや}たちも、喜んでくれるかもしれせん。古典は私たちの日々の感情の中で生きつづけてほしいと、願っているでしょうから。

私の少女時代、さまざまな作家が筆をとつて古典の紹介をされていたものでした。少女の私はそれらをむさぼり読み、そこから空想を紡いで、原典を想像したものでした。このささやかな案内の書が、年若い方の心に落ちた一粒の種子^{たねこ}となり、いつか花を咲かせることになればどんなに嬉しいことでしょう。

気楽な説き語りをまとめて下さった工藤直子さん、企画を推進して下さった山崎れいみさん、この本を作つて下さった集英社文芸出版部の村田登志江さんにお礼申しあげます。

一九八八年 夏

田辺聖子

古典の森は花ざかり

古典には、面白いはなしが沢山ありますから、お若い方も、なじんでみられると、きつと楽しいと思いますよ。これから、ぼちぼち、お茶でも飲みながら、古典のおしゃべりしましょうか。私も浅学ながら古典、大好きなのです。だから、お若い方に「こんなに面白い古典があるのよ」って伝えたい気持ちもあって、よく、古典に関するエッセイや、小説、書いてるのですけど。まさにファンの方からお便りいただいてね、「女の長風呂」を書いてる田辺聖子さんと『文車日記』の著者、田辺聖子氏とは、同姓同名の別人だと、ずっと思ひこんでおりました。それが今、同一人物だと知ってビックリしております。って。こっちがビックリしてしもうた（笑）。

古典にふれるといつても、いきなり『源氏物語』の原文を読み通そうなんていうのはしんどいわねえ。私の『新源氏物語』を、入門の感じで読んで頂いて、それから『与謝野源氏』『円地源氏』『谷崎源氏』『村山源氏』……など、好きな本をたどって行ってね。よくなじんだところで原文をよまれると、とても面白くお読みになれると思いますよ。

今のお若い方たちで、『源氏』を読み通した方は少ないというけど、私たちのころでもそうでしたよ、「須磨返り」「明石返り」という言葉があるのよ。つまりね、頑張つて、源氏が流される「須磨」の巻「明石」の巻まで読みすすむんやけど、ここまでくるとへああ、もうワカタ、もうええわ」と戻ってくる（笑）。

「都から須磨へ流されはったんやろ？　そこまでは知ってるねん」へそれから、どないになったか知ってる？」へ……どないなるの？」へ許されて都へ戻らはってなあ……」へあれえ、また帰らはるの？」へ帰らな、どないするのん！（笑）、帰りはってから、またいろいろあるねんよ」へふーん、知らなかった！（笑）。

……とにかく、あまり気ばらずに、惹かれるところ、なじんだところから入っていくといいと思いますね。

私たちのころは、小学校の五、六年のころかしら、「若紫」の巻の一部が国定教科書にのっていましてね、源氏が、幼い紫の上をはじめてみる場面、髪を扇を広げたようにゆらゆらさせて「雀の子を犬君が逃がした」といって駆けこんでくるところ、そこが、やさしく噛みくだいた文章ででているの。これが、『源氏』にふれた最初ね。

女学校では、古文はみな暗記させられました。『源氏』は「須磨」の巻のはじめ。ほかに『太平記』『平家物語』『方丈記』などのそれぞれ一部……漢詩なんかも、みな覚えさせられてね。いま思うと暗記させられたの、良かったと思いますよ。

戦後すぐ、私は会社に通ってたのだけど、電車の中で読む本がなくてね、町は焼け野原で出版物も出まわってない。あるとしても、カストリ雑誌（戦後、出版が自由になって、どっと出た粗悪低俗な雑誌のこと）みたいなもんばかりで、女の子の読むものがないの。しょうがないから、国文科時代のテキストばかり読んでたの。そんなことも、古典になじむキッカケになったみたい

ですね。

こうして、いろんな折に読んだものだけど、『源氏物語』というのは、それを読む年齢で、年ごとに、ちがう解釈が出てきましてね、こちらの人生経験が深まるにつれて、より深く心理が読みとれたりしますね。……こっちが何かを持って向きあうと、それだけのものを返してくれる本やと思うわ。――

私の場合、若いころ、「夕顔」の巻で、手に汗にぎるような場面をみつけましてね、それが、原文に照らしあわせて読んで、どきどきするほど面白かったのです。

こわい場面なんですけどね。源氏が恋人の夕顔をつれて、あばら屋に泊ると、夜、ぼうっと枕上^{まくらがみ}に女の影がたってへわたしを可愛がらないで、あなたは、こんなひとを可愛がるのですか〜といつて、夕顔にとりついて……。

源氏が、はっと目を覚ますと、夕顔が、もうなんだかうつつで、ぐったり倒れているのね。で、刀をぬいて、魔よけにして、家来の惟光^{これみつ}を呼びますね。でも、応えるものはいなくて、手をたたいて呼んでもコダマが返ってくるばかり。廊下へ出てみると、これはしたり、灯りが全部消えている。……ふくろうの鳴く声ばかりして……こわいですね。

こういうところ、原文で読んでいくと、すごくてね。何度も読んで、わくわくしたものです。

自分が「わあ面白いなあ」と思ったところを見つけたら、そこを原典で読んでみたくなる。そして何回か読んでみると、そのうちに、だんだん古文の呼吸みたいなものが、のみこめてくるのよね。